

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月9日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720130

研究課題名（和文） アレクサンダー・クルーゲの「対抗公共圏」をめぐる理論と実践

研究課題名（英文） Alexander Kluge's Theory and Practice on the "oppositional public sphere"

研究代表者

竹峰 義和（TAKEMINE YOSHIKAZU）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20551609

研究成果の概要（和文）：本研究は、アレクサンダー・クルーゲの「対抗公共圏」概念と、その実践である映画監督およびTVプロデューサーとしての活動を、フランクフルト学派の思想的なコンテクストに置き直して検証した。そのなかで、「経験の地平」の変革をめぐるクルーゲのメディア公共圏論がもつ今日的な意義を明らかにした。その最終的な成果の一部は、英語を含む複数の論考のほか、ブラジルで開催された批判理論をめぐるシンポジウムの口頭発表として発表された。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on Alexander Kluge's concept of "oppositional public sphere" as well as his activities as film-maker and TV producer, which aim at converting his theory of the public sphere and the visual media into practice. By relocating them in the context of the Frankfurt School, this research shows the actual meaning of Kluge's thoughts concerning the public sphere, which ultimately aims at transforming "the horizons of experience" of masses. The results of this research were made public as a presentation which was made at an international symposium in Brazil, as well as in several academic papers, including one in English.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2011年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2012年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,900,000 | 570,000 | 2,470,000 |

研究分野：ヨーロッパ文学（英文学を除く）

科研費の分科・細目：独文学

キーワード：テレビ、フランクフルト学派、メディア、公共圏、文化産業、知覚

1. 研究開始当初の背景

（1）もっぱら〈ニュー・ジャーマン・シネマ〉の旗手として知られる映像作家のアレクサンダー・クルーゲ（1937-）は、同時にフランクフルト学派第二世代に属する社会思

想家として、テクノロジー・メディアと公共空間のありかたをめぐる思弁的省察を重ねてきた。そこで理論的な中核をなすのが、メディアによって媒介される「対抗公共圏」という理念である。とりわけ理論的主著であ

る『公共圏と経験』(1972)で、メディア産業が供給する「疑似経験」によって消費者大衆が公共的表象のネットワークから排除されていると批判したクルーゲは、そのような現状を打破するためには、社会的経験の地平を新たに再編成し、想起、時間、記憶、感情、ファンタジーといった「経験」にまつわる諸契機を回復させるような「対抗公共圏」を組織することが必要であり、映画やテレビといったメディア機構の内部において、大衆に「経験」の回路を開くような「対抗生産物」を戦略的に流通させることが有効だと主張した。そして、クルーゲにおいて特筆すべきは、そのような理論的提言をみずから実践するべく、1970-80年代は映画作品をつうじて、80年代後半以降はテレビ・プロデューサーとして、既存のメディアを〈他なるもの〉を「経験」するための知覚媒体へと転換させるという実験を試みつつけているのである。

(2) 公共メディアの社会的機能というテーマについては、A・ホネットやB・スティグラーといった現代の社会哲学者も盛んに論じているが、現実にそくした実践的解法という観点に欠ける傾向は否めない。それゆえ、公共圏とメディアのオルタナティブな可能性を理論と実践の双方から追及しつづけたクルーゲの仕事を改めて包括的に検証することが急務である。

2. 研究の目的

本研究は、現代ドイツの映像作家・社会思想家・小説家のアレクサンダー・クルーゲの理論的中核をなす「対抗公共圏」という理念を、アドルノをはじめ、ベンヤミン、ハーバーマス、ネークトなどのフランクフルト学派との思想的関連において位置づけたうえで、1960年代から現在にかけてクルーゲが、みずからの「対抗公共圏」論の実践としておこなってきた映画監督・テレビ・プロデューサーとしての活動を、思想的・メディア環境的なコンテクストを踏まえつつ、そのアクチュアルな射程とともに検証する。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、次の三つのプロセスをつうじて遂行された。

- ①クルーゲの著作における「対抗公共圏」概念の理論的再構成
- ②フランクフルト学派の思想的コンテクスト内での「対抗公共圏」概念の系譜的位置づけ
- ③「対抗公共圏」論の戦略的実践としてのクルーゲの映像制作・政治・教育活動の検証
これによって、「対抗公共圏」概念の理論的・思想的な内実と、それが映像メディアで実行に移される経緯、クルーゲのメディア戦略

の可能性と問題点を段階的に明らかにした。

(2) 具体的には、①『公共圏と経験』(1972)と関連論考 ②『歴史と我意』(1981) ③1980年代以降のメディア作品およびその関連論考 という3つの範疇において「対抗公共圏」という理念的概念がどのように理論的に位置付けられているかを分析することで、メディア環境や社会システムの変化に応じて柔軟に練り直されていくクルーゲのメディア社会理論の変遷の軌跡をたどった。その作業と並行して、〈知覚媒体〉としてのテクノロジー・メディアをめぐるクルーゲの理論的考察が、フランクフルト学派の思想的コンテクストのなかでどのように位置づけられるのか、という問題を、1) アドルノの文化産業論 2) 後期アドルノの美学理論 3) ベンヤミンの複製技術論と「経験」概念 4) ハーバーマスとネークトの「公共圏」をめぐる議論 との関連に焦点を当てて検討した。

(3) さらに、以上の研究で理論的輪郭が明らかとなった「対抗公共圏」論が、クルーゲの多様な活動において実践されていった過程を、コンテクスト的な連関を踏まえながら探査した。とりわけ、テレビ制作会社 DCTP の設立(1987)と番組制作活動を、大衆メディアを拠点とした「対抗公共圏」形成のための実践的営為という観点から包括的に検証した。さらに、その作業と並行するかたちで、2008-09年に初めてまとめたかたちでソフト化されたクルーゲ製作のテレビ番組について、スタイル・内容・放送形態などを多元的に分析することで、視聴者大衆の知覚の変容を狙ったクルーゲの試みの現実的な射程について分析をおこなった。

(4) 研究遂行にあたっては、ファビオ・A・デュラオ教授(カンピナス州立大学)とこれまで培ってきた緊密な研究交流をさらに発展させていくなかで、本研究成果を国際的な場で問うことを試みた。

4. 研究成果

(1) アレクサンダー・クルーゲの「対抗公共圏」概念を、アドルノの社会思想と美学思想との比較のなかで再検証することをつうじて、フランクフルト学派の思想的なコンテクストに置き直した。とりわけ、クルーゲの名著『公共圏と経験』(1972)における「意識産業」批判と、テレビをはじめとするテクノロジー・メディアによる大衆の「経験の地変」の再編成と「対抗公共圏」の構築をめぐる議論が、ハーバーマスの「市民的公共性」概念にたいする批判的応答という含意が込

められていたこと、およびアドルノの「文化産業」論および『美学理論』における諸モチーフ（「経験」「知覚」「想起」）を発展的に踏襲したものであることを検証した。また、そこで析出された論点から、アドルノの「文化産業」論の今日的な意義と限界について考察した。くわえて、1980年代後半からクルーゲがみずからの「対抗公共圏」論の実践として開始したテレビ・プロデューサーおよび映像作家としての活動の実践的射程を、2008年に発表された映像作品『イデオロギー的な古典古代からのニュース:マルクス-エイゼンシュテイン-資本論』の作品分析と受容形態についての考察をつうじて浮かび上がらせることを試みた。

(2) フランクフルト学派の思想的コンテクストのなかで理論的内実を検証したクルーゲの「対抗公共圏」「プロレタリアート公共圏」の概念に関して、アドルノの文化産業論、ベンヤミンの「経験」概念、およびハーバーマスの「市民的公共性」概念との比較をつうじて思想的特徴を明らかにすることを試みた。さらに、「対抗公共圏」概念が、『公共圏と経験』(1972)と『歴史と我意』(1981)というクルーゲの2冊の理論的主著のなかでどのように変容していったのか、その軌跡を「経験」「知覚」「モンタージュ」といった鍵概念を軸に検証するとともに、クルーゲの映像作家としての活動をつうじて「対抗公共圏」論いかに実践へと移されていったかを、主に1980年代半ばのみずからのテレビ制作会社DCTPの成立過程とそこでのメディア戦略を再構成することをつうじて多面的に考察した。くわえて、クルーゲのメディア思想と映像作品の特徴をなす「モンタージュ」という手法や、ストーリー展開よりも観客に与える知覚効果に重点をおく「アトラクション」的なスタイルについて、1900~1910年代に制作された初期映画や、『カリガリ博士』(1921)に象徴されるヴァイマル時代のドイツ映画との比較をつうじて、その特徴を明らかにした。

(3) クルーゲが1981年にオスカー・ネクトとの共著として発表した『歴史と我意』における「労働」の概念の理論的背景と射程を明らかにした。クルーゲたちはこの概念を歴史学・生物学・人類学・文学・メディア論などの領域を横断するかたちでラディカルに拡張するとともに、社会的・歴史的に分断されてきた大衆の「労働能力」の数々をたがいに結合させ、転覆的にモンタージュすることで、社会的経験の地平を新たに再編成する必要があると主張している。本研究では、このようなクルーゲの「労働」をめぐる思想を、マルクスからアドルノ、ハーバーマスにいた

るフランクフルト学派の理論的背景のなかに位置づけたうえで、さらに①生産機構のラディカルな変革を志向していたクルーゲが、1980年代以降、広義における大衆の「労働能力 Arbeitsvermögen」の再組織化という契機を重視する方向にシフトしていったこと ②そのための具体的実践として、モンタージュという手法が戦略的に活用されていること、③そこに後期アドルノのテクノロジー・メディア論からの影響が顕著なかたちで見られること、の3点を示した。

(4) 最終的な研究成果は、とりわけ、ファビオ・A・ドゥラオ教授の編集による英語の論文集への寄稿論文のほか、2012年5月に日本独文学会春季研究発表会において口頭発表した「(労働)のメタモルフォーゼーアレクサンダー・クルーゲの「対抗公共圏」論をめぐって」、および、同年9月にブラジル・パウリスタ大学(サンパウロ州アララクアラ市)にて開催された国際シンポジウム「Teoria Crítica e Educação (批判理論と教育)」でドイツ語にて口頭発表した「Die Emanzipation der filmischen Bilder: Die ‚Montage‘ bei Theodor W. Adorno und Alexander Kluge」というかたちで発表した(後者は、それをもとにした学術論文のブラジル・ポルトガル語への翻訳が2013年度に共著として刊行予定)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

① 竹峰義和、マルクス主義の死後の生—アレクサンダー・クルーゲ『イデオロギー的な古典古代からのニュース:マルクス-エイゼンシュテイン-資本論』(2008年)をめぐるノート、査読無、思想 No.1032、2010年、pp.93-112

② 竹峰義和、ハリウッドの精神からの全体主義の誕生—アドルノの文化産業論をめぐって、査読有、桜門論叢 77号、2010年、pp.35-54

③ 竹峰義和、DU MUSST CALIGARI WERDEN! Selbstverlust und Rausch im Weimarer Kino、査読有、桜文論叢 80号、2011年、pp.121-131

④ 竹峰義和、外来語の救済—初期アドルノにおけるクラウド的な主題をめぐって、査読無、思想 No.1058、2012年、pp.152-172

〔学会発表〕(計3件)

竹峰義和、デジタル・メディア時代の批判理論—アドルノ文化産業論 再考、神戸大学国

際文化学研究科メディア文化研究センター
主催「メディアの変容と文化の公共性」公開
セミナー、神戸大学鶴甲キャンパス「メディア
の変容と文化の公共性」公開セミナー（神
戸大学）、2010年3月16日（招待講演）

竹峰義和、〈労働〉のメタモルフォーゼーア
レクサンダー・クルーゲの「対抗公共圏」論
をめぐって、第66回日本独文学会春季研究
発表会、上智大学、2012年5月20日

竹峰義和、Die Emanzipation der filmischen
Bilder: Die 'Montage' bei Theodor W. Adorno und
Alexander Kluge、国際シンポジウム「Teoria
Crítica e Educação」、2012年9月12日、ブラ
ジル・パウリスタ大学（サンパウロ州アララ
クアラ市）

〔図書〕（計1件）

Yoshikazu Takemine: "Culture Industry Today"
(共著、ed.by Fabio A. Durao: 執筆担当 Chapter
4: Is it barbarous to watch TV after Auschwitz? :
Th. W. Adorno on the television in the 1950s,
pp.71-91), Cambridge Scholars Publishing. 71-92
(2010)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹峰 義和 (TAKEMINE YOSHIKAZU)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：20551609

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：